

JICA 中国事務所ニュース

2010年3月号

【トピックス】

- ◎ 中国輸出入銀行との対外経済協力に関する合同ワークショップ 2

【ニュース】

- ◎ 新疆天然草地生態保護と牧畜民定住プロジェクト 3
◎ 貴州省道真県・雷山県貧困対策モデルを貴州省への普及 3
◎ 皆にとつての「心のケア」 4
◎ 第五回中国 NGO-JICA 交流会が開かれました 5
【寄稿コーナー】 6
【赴任者紹介コーナー】 7



中国輸出入銀行の対外経済協力に関する合同ワークショップを開催



中国天山賞を授賞した伊賀専門家

* お知らせ:

皆様からのご感想やコメントをお待ちしております。

メールアドレス：shenxiaojing.cn@jica.go.jp

- <http://www.jica.go.jp/china/office/library/news/index.html> (中国事務所ニュース)
- <http://j.people.com.cn/99005/index.html> (ボランティア活動)
- <http://searchina.ne.jp/jica> (サーチナJICAページ)

トピックス

中国輸出入銀行との対外経済協力に関する合同ワークショップ ～アフリカ、気候変動等について議論～

3月1日と2日の二日間にわたり、北京において中国輸出入銀行(The Export-Import Bank of China、略称:中国輸銀)と、対外経済協力業務に関する合同ワークショップを開催しました。

本ワークショップでは、両機関の最近の戦略などの情報共有に加えて、アフリカ向け支援や気候変動対策に関する取り組み等の重点課題について、双方の取り組み方針・状況を紹介、幅広く有意義な意見交換を行いました。さらに、JICAも積極的に参画している経済危機対応の一つである世界銀行の「INFRAプラットフォーム(注)」の概要と活用についても意見交換を行いました。

中国輸銀は、1994年に中国政府によって設立された政府系金融機関であり、中国企业による輸出入や海外投資の促進のための金融支援、中国政府が行う対外経済協力のうち、相手国政府向け等の低金利・長期返済期間の優遇借款の実施等を担当しています。中国は近年、その経済発展と同時に、対外経済協力活動を急速に拡大しています。こうした状況を踏まえ、JICAは双方の業務に対する理解を深め、協力を深化させていくことを目的に、2008年3月以来これまでに中国輸銀との間で2回に亘って合同ワークショップを行い、案件形成、実施監理、事後評価、リスク管理等の業務実務に係る情報・知見の共有を行ってきました。今般のワークショップ開催も、上記の取組みの一環として行ったものです。

アジア地域では、中国に加えて、韓国、タイ、マレーシアといった国々が開発途上国に対し支援を行う動きが活発化しています。JICAは、今回の合同ワークショップのような

情報交換・経験交流を通じて、これらの国々の経済協力機関とのパートナーシップの構築・深化に積極的に取り組む方針です。

中国政府が展開する対外経済協力について、JICAと情報共有を進めていくというテーマについては、2009年12月に緒方理事長が中国来訪した折、要人との会議でも話題になっており、JICA中国事務所としては、今後重要なテーマの一つとして、中国政府との情報交換・交流を進めていく所存です。

(所員 登坂宗太)

(注) 世界銀行による経済危機対応のアプローチの一つであり、途上国の今後必要なインフラ投資や事業を算出し、ドナー間の支援調整や連携を目指す枠組み。

ニュース

新疆天然草地生態保護と牧畜民定住プロジェクトの 伊賀リーダーが「中国天山獎」を受賞



新疆畜牧科学院で賞を受け取る伊賀リーダー

「新疆天然草地生態保護と牧畜民定住プロジェクト」は、天然草地の保護と牧畜民の生計向上を目指して、持続可能な定住事業のための計画策定や技術普及を行っており、今年度は、5年間のプロジェクトの3年目にあたります。

そのプロジェクトのリーダーである伊賀啓文専門家が、昨年の「中国天山獎」を受賞されました。

「中国天山獎」とは、新疆ウイグル自治区において、特に多大な貢献をしたと認められた各分野の外国人専門家に対し、新疆ウイグル自治区人民政府より授与される賞です。

1999年に創設されて以来、これまで100名ほどの外国人に授与されてきているそうです。

実は、授賞式は昨年の国慶節の期間にウルムチ市にて行われましたが、昨年7月の新疆の暴動事件以降、日本人専門家の渡航を見合わせていました。そのため、中国側の実施機関である新疆畜牧科学院のカウンターパートが代理で出席し、賞を預かっていました。

この2月の初旬に、年度末の業務処理を行うために特別の措置として、専門家チームがウルムチ市に赴いた際、あらためて、カウンターパートから伊賀リーダーに「中国天山獎」が手渡され、お祝いと同時に感謝の言葉が述べられました。

伊賀リーダーからは、この賞はプロジェクトの日中双方のみんなが受賞したものであり、プロジェクトの活動が認められたことは非常にうれしい、との挨拶がありました。

正式な授賞式には出席できませんでしたが、今回のカウンターパートとの間でのミニ授賞式は、これまでの協力を通して双方が築き上げてきた良い関係が非常に表れた心温まるものとなりました。(企画調査員 松本 丞史)

貴州省道真県雷山県貧困対策モデルを貴州省への普及

貴州省は1人あたりのGDPが中国の中でも最も低い省であり、発展著しい中国においてもその貧困問題は依然として深刻です。プロジェクトの対象地域である道真県は仡佬(コーラオ)族、土家(トゥチャ)族などが、また雷山県は苗(ミャオ)族などの少数民族が多く住む地域。彼らは民族の伝統を守りつつ生活していますが、人と家畜の生活圏が分離されていない、手洗いの習慣がないなど衛生

面の問題が大きく、小学生の寄生虫感染率は、道真県で53.8%、雷山県に至っては74.4%にも達し、健康診断を受診したことのある女性もほとんどいないという状態でした。

こうした状況に対し、プロジェクトでは家庭内における保健の取り組みを中心に、出稼ぎ収入に頼っている住民の生活改善のために様々な取り組みを行いました。

このプロジェクトは、2つの県での取り組み

から「総合貧困対策モデル」を作成し、そのモデルをお手本に、他の地域が生活改善に取り組んでいくことを目的としました。プロジェクト終了間近の2010年1月、マニュアルと事例集が出来上がり、貴州省政府がこれを省内に広めていくことを宣言しました。これは、プロジェクトの大きな目的が達成されたことを意味しています。

日中関係者の努力の結果はこの2冊の本にまとめられましたが、今後、住民の参加により自助努力を引き出すこのモデルがさらに改善され普及していくことで、内陸部の貧困が緩和されることを願ってやみません。

(所員 林哲浩)



村民に対して健康教育を行っている



プロジェクト成果品となる報告書とマニュアル

みんなのための「こころのケア」 ～第2回現地セミナーを実施～



学校教師・心理士など100名が参加

『ジャンケンポン（石頭・剪子・布！！）』

セミナー会場に参加者の元気な声が響く。学級づくりの中で教師ができるこころのケアとして、実際に兵庫の小学校教師が震災後、クラスで実践したゲームを紹介した時の一場面です。

昨年6月よりスタートした「こころのケア人材育成プロジェクト」では、1月20～22日までの3日間、四川省成都市でプロジェクト2回目となる現地セミナーを実施しました。今回



講義の後も参加者から質問・相談が相次ぐ

は「研修終了後、すぐに実用できる技術の習得」をコンセプトとして、プロジェクトの堤専門家が中心となって中華全国婦人連合会(C/P機関)とともにプログラムを練り上げてきました。

『震災で家族を亡くし、自分だけ助かったことについて今も自分を責めている子どもがいる。感情を閉ざし何も話してくれない。どう接したら良いか？』…これは教育関係の参加者から聞かれた現場の症例です。兵庫からい

らした短期専門家の先生は、こう答えました。『周りの人が「自分を責めることはない」と繰り返し言うことが必要。「悔しかったね、辛かったね」と声を掛けてあげても良い。一緒に泣いても良い。ただ、援助者は背中を立てて凜とし、泣き崩れないこと。もたれる大きな木になって支えること。』

プロジェクトでは現場で実際の被災者支援に従事する人材の育成を主な目的としています。そのための教材開発と研修を体系的

に進めていくのが当面の課題ですが、研修に集まる彼ら自身が被災者であるケースも多く、自らストレスを抱えながら、他者を支えるという活動になるわけです。プロジェクトでは「支援者自身のセルフケア」の手法も伝授していますが、このような研修の機会に皆で活動上の悩みを共有し、共に励ましあうことで、プロジェクトが心の拠り所「こころのオアシス」的存在となっていければと願っています。(所員 小田遼太郎)

今回、神戸新聞の岸本記者に同行いただき、関係者にインタビューを行いました。プロジェクトの様子が連載(計5回)されました!

掲載記事はこちらから↓

<http://www.kobe-np.jp/rentoku/shakai/201002kokoro/index.shtml>



第五回中国 NGO-JICA 交流会が開かれました



日中 NGO 協力の経験交流を行う参加者の皆さん

2010年3月9日午後、JICA 中国事務所は第五回中国 NGO-JICA 交流会を開きました。30 余りの日中 NGO 団体より 50 人を越える参加者は同交流会に出席しました。また、在中国日本大使館、国際交流基金北京日本文化センターなど日本側関係機関からの代表や日本人留学生も参加し、日中 NGO 団体と一緒に両国 NGO の協力問題をめぐって情報交換・意見交換を行いました。

まず、JICA 中国事務所の草の根技術協力プロジェクト担当者から JICA の概要、草の根

技術プロジェクトの申請方法などを紹介しました。その後、経験豊富な草の根 NGO 実践者・NGO 研究者から、様々な角度から報告がありました。

北京紅丹丹教育文化交流中心の鄭曉潔主任は日本点字図書館との協力事業—「視覚障害者音声情報提供技術指導事業」を実施する過程において得た感想などを発表し、北京慧靈知的障害者コミュニティサービス機構の孟維娜主任は 20 年前の訪日見聞や、この訪日経験が 20 年来自分の NGO 運営にもたらした影響などをいきいきと述べました。

また、駒沢大学李妍焱準教授は日本 NPO の歴史、現況を研究者の角度から紹介し、日本草の根 NGO の独特な特徴や、日中 NGO の連携における誤解や困難などを述べ、在席の NGO 代表らの参考になったものと思われる。

今回の NGO 交流会を通じ、日中 NGO 団体間の相互理解が促進し、より多くの草の根 NGO に JICA の NGO 支援事業を理解して頂いたとすれば幸いです。

(NGO-JICA ジャパンデスク 周迎)

同交流会に関する記事はこちらから↓

http://www.pubchn.com/articles.php?article_id=103364

(中国語)

寄稿コーナー

Pia-smile 第1回講演会開催



講演している JICA 鈴木所員

昨年年 12 月、北京大学にて Pia-smile 第 1 回講演会～対中協力から見る農村現状～を JICA の方々と共催で開催させていただきました。

Pia-smile は日本人留学生ボランティアグループで、活動のひとつに学期毎に 2 回開催する農村ツアーがあります。これは河北省にある希望小学校(希望工程という広範な社会慈善活動によって貧困が原因で失学してしまった児童のために建設された小学校)を訪問し、1 泊 2 日で現地の生活を体験し、交流するという活動です。そんな私達が今回初めて講演会に挑戦した最大の理由は“知ってもらう”ためです。私は全てのことは“知る”ことによって始まると思っています。

現在中国には数多くの日本人留学生がいます。それぞれが違った目的や目標を持ち



沢山の学生さんが参加してくれました

中国という広大な大地で言語や文化、歴史、経済などを学んでいます。その中には農村の貧困問題に関心を持ち、自らこれらの問題を探求しようとする人もいますが、中には安い物価、自由な暮らしに慣れこのような現実を全く知らない人もいます。

私が今回の講演会に参加してもらいたいと思ったのは、特に後者のような学生でした。彼らに“知る”きっかけを与え、それを通して自分達の生活を見直してもらう。自分達はどれだけ幸せか、またそんな私達には貧困問題を抱えている農民に何が出来るか。農村現状を“知る”ことにより、学び、感じるきっかけを作りたいという熱い思いでスタッフ一同今回の講演会に全力で取り組みました。

初めての講演会にも関わらず当日は 40 名前後の方が参加してくれました。講演は JICA の方が質問形式で分かりやすく行ってくれた

お陰で、参加者一人一人が真剣にメモを取り、質問をし、積極的な姿勢で講演会に参加していました。また講演会後は多くのお褒めの言葉や感謝の言葉をいただくことが出来ました。

今後も私達は学生のボランティア精神を向上させると同時に、日中友好の発展に貢献できるような活動を行っていきたくと考えています。

最後になりましたが、JICAの職員の方々、企画から開催に至るまで協力していただき、本当にありがとうございました。

(Pia-Smile 代表 谷地中歩夢(北京外国語大学))

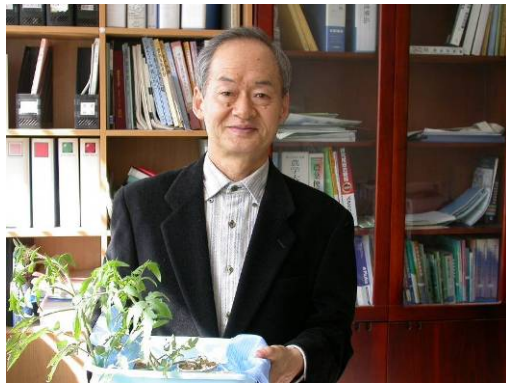
注：本講演会の様子は北京の日本語フリーペーパー(TOKOTOKO 1、2月号)にも掲載されました。

帰赴任者紹介コーナー

長期専門家 上原洋一

～持続的農業技術研究計画プロジェクト～ (第2期－環境に優しい農業技術開発及び普及)

健康上の理由から、当初予定よりも3ヶ月遅れで、1月18日に着任しました。念のため受診のPET検査で、思いがけない臓器に陽性反応が現れ、要経過観察となり、当人と家族はかなり



心配し、また既に着任の同僚チーム員、そしてJICA関係各位にご迷惑をおかけしました。経過観察はまだ続きますが、まず大丈夫だろうと、感度が高すぎる最新医療機器の過剰反応のせいだったろうと、密かに思っています。

当プロジェクトは、中国の農業が引き起こしている環境汚染、それは化学肥料多投入、農薬の不適切多量使用、家畜糞尿の不適切処理などで各地で広面積に引き起こされている汚染ですが、それを低減する技術を開発し、普及にまでもってゆ

くことを目指します。私はその中の技術開発面を担当します。土と水に大別されますが、主に「土」を分担します。私は農水省の研究機関でずっと、土を対象にした研究をやってきたそのキャリアを精一杯生かしたいと思っています。何人もの中国側カウンターパートのそれぞれの研究に助言をし、研究推進のため日本から技術を持つ研究員を招き、また中国若手研究員の日本研修の手配をするなどの仕事に当たります。

当プロジェクトの調査、研究のサイトは、山東省、湖南省、寧夏回族自治区内にあります。山東省では広大な面積に青々と育つネギに強い印象を受けました。湖南省はつい先日訪ね、1年に2回作るとい水田の広がりを見、また無処理排水のため近くの水田が収穫皆無となっているという豚舎を見ました。寧夏は近日中に初訪問の予定です。3サイトにはこれから何回も足を運ぶことになるでしょう。元汚染田に稲が実り、湖のアオコ発生がなくなるようにと夢を描きながら。どうぞよろしくお願いたします。

長期専門家 大西満信、掛部晋、森貞芳子
～四川省震災後森林植生復旧計画プロジェクト～



被災した山林と大西満信専門家(左)、掛部晋専門家(右)、森貞芳子業務調整員

2008年5月12日に発生した、四川大地震については、皆さんの記憶に新しいと思います。M8.0の巨大地震で、死傷者46万人、家屋倒壊22万棟と大きな被害をもたらしました。現在、被災地では住宅、道路等の再建が急ピッチで進められています。

一方で、地震による森林の被害面積は493万ムーに及び、復旧は、まだまだこれからという状況です。この森林植生を回復するため、日本の治山技術と中国の技術を合わせ現地に適合した技術を開発することを目的として本プロジェクトが2月1日から開始しました。

具体的には、汶川県、綿竹市、北川県の3市県をプロジェクトサイトとして、それぞれに試験施工地を設け、治山事業を実施し、その実施を通じて技術開発、技術普及を行っていこうというものです。プロジェクト事務所を、成都市の四川省林業庁の敷地内に開設しました。日本からはチーフアドバイザー兼全体計画担当の大西満信、治山設計兼治山施工担当の掛部晋、業務調整兼研修担当の森貞芳子の3名が着任しました。大西チーフは林野庁の治山の専門家で、また、2002年から3年間、「四川省森林造成モデルプロジェクト」のチーフアドバイザーも務めました。そのため、治山についても四川省の森林についても深い造詣があります。私掛部は、林野庁において治山の計画から評価まで幅広い業務を担当し、治山を専門にしています。森貞調整員は、中国におけるいくつかのJICAプロジェクトの業務調整の経験がある、経験豊富な業務調整員で、JICAの理事長賞を受賞しています。専門家3名が力を合わせ、中日協力して、緑の大地を復活させたいと思っています。3月19日には、プロジェクトのキックオフセミナー及び関係者によるワークショップを開催し、これから本格的な事業実施にとりかかっています。

中日協力して、緑の大地を復活させたいと思っています。

ロゴマークの円形は中国と日本の友好をイメージしています。三本の筋は四川省の「川」、緑色の山と木の形は、地震によって被害を受けた山を治山技術によって森林に復活させたいという願いを表したものです。

PFREは「Project on Forest Restoration after the Earthquake in Sichuan Province (日訳:四川省震災後森林植生復旧計画プロジェクト)」の頭文字です。プロジェクト立ち上

げ時に考案されました。

(長期専門家 掛部晋)

長期専門家 田所雅之、小西秀夫、成海政樹
～中国西部地区林業人材育成プロジェクト～



小西秀夫専門家 田所雅之チーフアドバイザー 成海政樹調整員

私たちは、田所雅之チーフアドバイザー、小西秀夫(林業技術・経営担当)専門家、成海政樹(業務調整・林業人材育成担当)のメンバーで、3月1日に着任しました。テーマは中国林業の最重要課題である「集体林権制度改革」と「国有林場改革」を取り上げます。活動内容は、両改革における効果的な研修を整備することを目的としています。プロジェクトの研修ターゲットは、中国西部地区の地方政府のお役人から農民まで幅広く、研修業務の他には、政策提言も求められています。

このようなプロジェクトのチーフとして着任した田所氏は、林野庁での当該テーマに関係する業務経験が非常に豊富で、現プロジェクトの前身の日中林業生態研修センター計画プロジェクトでは森林技術総合研修所長として、訪日研修生の受入れや短期専門家として中国の林業界に接してきました。また、林業専門家である小西氏は、森林技術総合研修所で長年研修業務に携わったほか、2000年～2002年には四川省で実施されていた林業プロジェクトに長期専門家として参加していました。そして、成海は前段プロジェクトの調整員を5年間勤めた後の再任となりました。

全員家族同伴で赴任しており、今後業務だけでなく、生活面でも皆様と接する機会があるかと思いますが、どうかよろしくお願いいたします。

(長期専門家 成海政樹)